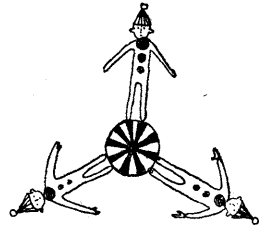


# 空に何ものかの現われる話

関 一 敏



1

空にふつう見えるはずのないもの、異形の存在が現わ

れることがある。前回紹介したパレの『怪物と不思議』

(一五七三)には、一八五八年版に第三章「空の怪物」

がつけくわえられていた。空の怪物といっても鳥類のそ

れではなく、ふつう空を飛ぶはずのないもの、天空に現

われようのない不思議なものたちの話である。なかには

六世紀後半のエトナ火山の噴火や、一六世紀ポルトガル

の一週間にわたる大地震など、あきらかに自然現象その

ものといった例も含まれているが、空より降り来る異物  
となると、さかしらの推測では追いつかない話がいくつ  
もある。

たとえば二世紀イタリアに乳と油の降った話、一二世  
紀英国に多量の血の雨が降った話、また小ささまざまな  
肉塊が五世紀半頃のイタリアに降った話、などなど。こ  
の肉については、ある部分は空中で鳥についばまれたも  
の、地上に届いた残りは長いこと腐らずに匂いや色も  
変わるがなかったという後日譚がつけくわえられて  
いる。さらに宗教色のつよい話として、天上の軍勢とい

う「黙示録」風の記録も少なくない。一五五〇年七月一九日、ザクセン・ウイッテンベルグの近郊で巨大な鹿が空に現われた。そのまわりで二組の大軍勢がすさまじい音をたてながら戦闘に入るや、血の雨が降りはじめた。その時太陽がふたつに割れ、ひとつは地に墜ちたというのである。天体の異常現象には、三つの太陽と三つの月というカール五世時代のエピソードのほかに、彗星の話がいくつもある。一五二八年一〇月九日、血の色をした彗星が恐慌をまきおこした。ちょうどその上に巨大な剣をもった腕が現われて、今にも振りおろさんばかりだったからである。さらに彗星の周辺には血染めの斧・短刀・剣が、蓬髪で髭をたくわえた男たちのおぞましい顔とともに、数知れず目撃されたという（バレ、一四二―七頁）。

この類の話は、なにも一六世紀以前のヨーロッパに限られるわけではない。「産業」と「科学」の時代、一九世紀から現代にかけても同種の不思議はたえることなく再生産されてきている。ここでは天空の異物がはっきり

とキリスト教的形象をとる場合をあげてみよう。最もポピュラーな形は十字架である。一八二六年二月一七日の日曜日、フランスのボワチエに近いミニエの村から大きな十字架が空に見えた。司教区調査委員会の記録によると、約六〇メートル上空に銀白色の十字架が紺碧の空を背にあざやかに浮びあがったとある（R. Laurentin,

*Vie authentique de Catherine Labouré*, vol. 2, 1980, Paris, p. 301）。これに似た現象は最近韓国からも伝えられている。教皇ヨハネパウロ二世の訪韓（今年の五月三日―七日）はソウル汝矣島<sup>ユイド</sup>広場の百万人集会の熱狂的歓迎ぶりとともになお記録に新しいニュースである。この訪問は韓国のカトリック受容二百周年にあたり、韓国人殉教者一〇三名の列聖ミサが教皇によってささげられるためのものだった。この一〇三名の福者が聖人に列せられることが発表されたのは昨年九月二十七日だが、その日、午前十一時にはソウル明洞大聖堂上空に大きな太陽環が現われた。さらにその二年前、一九八一年一〇月一八日午前一〇時から二分間、「カトリック朝鮮教区設立

一五〇周年」を祝うヨイド広場の東北上空には白い十字架が目撃されたのである。両方ともやや不明瞭ながら写真が残されている（『韓国カトリック殉教聖地めぐり』一九八四年、日本カトリック中央協議会祝賀巡礼団実行委員会編、扉の写真）。

## 2

例をあげるのはこれくらいにしておこう。確かめようのない話は並べはじめればきりががない。ただ、こうした不思議譚の系譜からみるならば、「現代の神話」UFOの登場もさほど奇異な出来事ではないことになる。この分野の泰斗であるユンクは人間の心の方へと、原型へとUFO現象を送り返そうとするだろう。「かりに空飛ぶ円盤が物理的に存在するとしても、これに呼応する心の反応が円盤によって作られたというよりは、たんにそれによって喚起されたにすぎないというべきである。空飛ぶ円盤についてなされてきたような神話的発言は円盤であろうとなかろうと、すべての時代に見出されるものな

のだ」（C.G. Jung, *Un mythe moderne*, 1961, Gallimard, p. 249）。ユンクの主張は、人間の心に潜む神話的原型がそれぞれの時代との社会的背景のなかでさまざまな空中異物の表象をうみおとしてきたこと、多様な形態をとりながらもそれらの根底には同一の心的過程（集合的無意識）の存在がたしかめられるはずであることをのべている。この見方にはある意味でたいへんな説得力がある。ある意味でというのは、ユンクによる説明がひとつの解釈体系として不可思議なるものたちをとりこむことに成功している、という意味である。カトリックのような、つねに他界との回路を確保することに力を注いできた宗教的伝統からみれば天の予兆（天のメッセージ）ととらえられてきた出来事は、ユンクによって人の方へと引きよせられ、無意識層からのメッセージに読みかえられるだろう。しかし、この説明体系の正しさは一定の抽象的レベルでしか成り立たないようにみえる。そこに捨象されてしまう時代と社会のあり方は、こういう見方からは一体どこに消えてしまうのだろうか。

宮田登は『増訂武江年表』によって一九世紀初頭、

化政期に光物が空中を飛来し、牛のごとき怪獣が二匹、空中を飛行した話をひいている。天から異物の落下する現象(豆の降る話、お蔭参りに降るお礼、天理教の甘露)と照らしあわせながら、宮田がみようとしているのは、多少とも流行神的な予兆にまつわる民衆意識とのかかわりのなかでこれらの不思議譚のもつ時代性と社会性のありかである。(『近世の流行神』一九七五年、評論社、一六八―一九頁)。同じような試みは現代のオカルト的カルト集団を派生させてきたUFOについても、それ以前のさまざまな怪異譚についてもなされうるはずである。たとえばパレのひく一六世紀の超常現象には宗教改革の戦闘状態を直接に反映した民衆心意を読みとることができようし、一九世紀の空の十字架にはフランス大革命以後の反カトリシズム運動への反撃(民衆的・教會的)をみとめることができるに違いない。けれども残念なことに、これらの出来事をさらに具体的に考えていくためには手がかりがあまりに少ない。ひとつひとつの出来事が誰に

よって(個人によって? 集団によって?) 体験され、いかなる過程をへて信ぜられ記録されてきたかを知る資料はおおかた失われてしまっている。つまりこうした話の大部分は、たとえ近現代であろうと噂として、ユンクのいう「幻の噂」(前掲三二頁)としてすでに伝承化して現われてくるのである。したがって選びうる方法のひとつはこの種の「記録」をすべて「伝承」としてとらえ、そうした物語の類型と構造を手がかりに伝承母体の心性へと遡行することである。この場合、たとえば「現代の神話」UFOは文字通りの「神話」として理解されることになる。

### 3

ここでとらうとする方法は、しかしながら物語の構造分析ではない。一九世紀から今世紀にかけてのヨーロッパ・カトリック文化圏には(そして、いずれのべるように米国プロテスタント文化圏にも違った形で)「奇蹟」的な現象が数多く報告されている。このうちのある種のも

のは、幸いなことにフランスをはじめとするカトリック教会（正確には司教区）と、米国においては新しい宗教運動ともいえるスピリチュアリズムの運動体が介入してきたことよって、たんなる噂に終らない多くの証言資料を残すことになった。具体的にいえばカトリシズムにおけるイエスの聖心（サクレ・クール）と聖母マリアの諸出現、プロテスタント文化圏での騒霊（ポルターガイスト）を端初とする霊界との交信の試みのことである。そして、ようやくここで「宗教人類学から見た子ども」のテーマに近づくことになるのだが、聖母マリアの出現とポルターガイストの発現はいずれも「子供」を媒介として、もう少し正確にいうと「子供」を媒介のものと信じられて来たのだった。まず、空に出現した不思議な人物が聖母として信仰をあつめ、やがて新たな一九世紀の巡礼地をうみだしていったフランスの一事件を追ってみることにしよう。

#### 4

この出来事の舞台となるボンマンは、ノルマンディーとブルターニュに挟まれたロワール地方マイエンスに属する。現在二千余名の人口をもつ村落である。事件の起きた一八七一年当時は一五軒ほどの家と八〇名ほどの住民からなる小集落にすぎなかった。普仏戦争の波がようやくこの地方を脅かしはじめていた同年一月一七日の夕刻、この村の空に不思議なものが到来した。数人の子供たち（九―一二歳）の目に「蒼い服の女性」がおよそ三時間にわたって出現し、無言のまま文字のメッセージを伝えたというのである。

はじめに空の奇異に気づいたのはバルブデット家の次男ユージェヌ（一二歳）だった。父親の仕事をはなれて納屋を出たところ、雪一面の風景の上方に女性らしきものが見えた。向かいのギドコック家の上方約六メートルのところ金色の星をちりばめた蒼色の服があり、美しい婦人が両手を広げてほほえんでいる。遅れて納屋から出てきた弟のジョゼフ（一〇歳）もこれを見て感嘆の声をあげる。ところが父にも母にも星がみえるばかりであ

る。母親が呼んできたシスターにも何もみえない。しかし、シスターが寄宿舎から二人の少女をつれてきたところ、その二人（フランソワーズ・リシェ一〇歳、ジャンヌ・マリ・ルボセ九歳）には見る事ができた。これを知ったもう一人のシスターは、村中の他の子供たちに声をかけて廻りはじめる。子供たちには見えるのだから、他のものと若い子を捜してこようというのである。この騒ぎを聞きつけて村人たちが集まりはじめる。その中にはゲラン司祭がおり、自分の目には映らぬ空中の何者かのしぐさを四人の子供たちの口をとおして知らされることになった。女性を見ることのできた子供は、かならずしもこの四人に限られていたわけではなかったらしい。二歳をすぎたばかりの赤ん坊がじっとその方向をみつめながら「ゼジュ！ゼジュ！」と叫んだ逸話がある。一説によるところはゼウスと言っていたというが、ゼジュならばイエスを表わすジュジュの音によく似ている。また、その場では何も言わずに家に帰り、後日その親が六歳の息子の「聖母」体験を主張した例や、父親に口止めされ

ていたためにはるか後になって（一九四五年の死の直前に）体験を告白した当時四歳の少年の例もある。こうした子供たちのさまざまな反応は、もちろん司教区調査委員会（一八七二・三一八七二・二）が真正の証人と認められた四人をふくめて、かれらのその後の長い人生に大きな影響力をもつことになる。

ポンマンの空中出現はたんに女性がそこに現われたという話ではない。十字架や刀剣、天上の軍勢とは異なっており、その女性は子供たちにほほえみ、一風変わったやり方でメッセージを伝えた。まず群がる人々の前で形象が変化を示し、四本のローソクがそれを取り囲むと胸に小さな赤い十字架が生じた。司祭に促された人々が祈りに入ったところ、像は一・五倍の大きさに伸びたという。と、その足下と屋根の間にするすると白い帯が約一〇メートルにわたってのび、金色の大文字が活字体でひとつずつそこに現われて三つの文章を作っていた。日本語に訳せば次のような意味になる——「さあ祈りなさい子供たち 神はまもなくあなたがたの願いを叶えるでしょう

う わが子は心を動かされず」。書いてしまえばこれだけのメッセージも、その場では遅々とした速度で現われたらしい。たとえば最初の「……子供たち」までで約一分が費され、しかもその一文字一文字が徐々に現われるたびに四人の子供らが競って読みあげていくのを、周囲の大人たちがある場合には混ぜ返し、確認し、しつように念をおしながら文意をうけとめていったのである。

こうして約三時間後、「わが子」のくだりで「聖母」の確証を得た人々が讚美歌をうたう前で、一回ぎりのボンマンの聖母出現は終了する。歌にあわせてほほえみつつ指を動かしていた聖母の顔に哀しげな表情がうかび、赤い磔刑のキリスト像（長さ五〇センチほどの十字架）がその手に現われた。星が移動して四本のローソクに点火してまわり、十字架が消えたところで大きな白いベールが下から徐々に聖母を蔽いはじめる。すべてが空から消えたのは夜の九時頃だった。

五日後の一月二二日、ボンマンの南方約五〇キロの地点に迫っていたプロシア軍が突如として退却を開始し

た。休戦協定はさらにその六日後、一月二八日に締結される。プロシア軍の「退却」はフランス軍ロワール部隊を驚かす突然の出来事であり、ボンマンをふくむ民衆の目には奇蹟的な事態と映った。やがてこうした経緯からは、敵軍の前進を阻んだ聖母の守護力という奇蹟譚と、実現した聖母の予言の物語が同時にうみおとされることになる（ボンマンの証言資料は R. Laurentin & A. Durand, *Pontmain—Histoire authentique*, 3 vols., Paris, 1970 を用いた）。

## 5

ごく簡単に要約したボンマンの聖母出現過程だけでも、そこには宗教史的な、あるいは社会的なさまざまな課題が詰めこまれているのを見ることが出来る。今これをアト・ランダムに列挙してみる。

(1) 他者には知覚できない不可視の存在が体験者から周囲の人々へと伝えられ、それとして信じられていくプロセスにはどのような段階が考えられるだろうか。ま

た、その際に介在する伝達媒体（「聖母」から体験者へ、体験者から周囲の人々へ、そして教会へ）のはたす役割の問題。

(2) 聖母出現のような不思議な体験をへた子供たちにとつて、その後の一生はどのような影響をそこから受けるというべきだろうか。他の事例（たとえばラ・サレット（一八四六））の子供たちのように、決して幸福とはいえない転変を経験した者をどうとらえることができるだろうか。また、ポンマンの四人のうち、第二次調査委員会（一九一九―二〇）への出頭を拒み「証言」を撤回したジャンヌ・マリ・ルボセの提起する「神秘体験」理解の問題。

(3) 「聖母」と子供、もしくは「不可視の靈的存在」と子供にまつわる時代の心性。フランス・カトリシズム、正確には地方差をともなったフランス各地のフォーク・カトリシズムからみた「子供」の靈性とその時代的形態。とりわけ合理的近代精神の担いつつあった産業社会における「子供」観と、一九世紀聖母出現の特権

の体験主体としての「子供」観とのずれとせめぎあい。

(4) 聖母出現の一九世紀以降の形態（「マリア出現群」とそれ以前の古典的形態（「羊飼いの伝説群」）との連続と断絶の二面性。とくにメッセージにみられる時代の趨勢をめぐって。

いささか大上段に構えてみたものの、これらの問いのすべてに対応するだけの準備があるわけではない。しながら聖母出現やポルターガイストの一九世紀以降のあり方には、これから二〇世紀末を生きようとしている私たちの心の奥底や身のまわりで、たえず起こりつつづけている不可解な出来事（病気や死もそのひとつである）に向けて放たれた他界からの、あるいは他界を信じようとした人々からのメッセージがこめられている。そのさいに何故か「子供」が仲介者として登場してくることに注意しながら、以下もうすこし詳しく、このての話をみていくことにしたい。（この項終り）

付記——文中にひいた韓国の不思議な現象についてのパンフレットは、藤本敏和氏（NHK国際局）の協力によって入手できた。記して感謝したい。